

# 学びをつなげる音楽授業

平井 李枝・小原 伸一・栢野 慈子・中村 直美・藤沼 明里

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日



# 学びをつなげる音楽授業<sup>†</sup>

平井 李枝\*・小原 伸一\*・栢野 慈子\*\*・中村 直美\*\*・藤沼 明里\*\*\*

宇都宮大学共同教育学部\*

宇都宮大学共同教育学部附属小学校\*\*

宇都宮大学共同教育学部附属中学校\*\*\*

本論文は、宇都宮大学共同教育学部および附属小学校、中学校が音楽プロジェクトとして音楽科の授業について、「学びをつなげる音楽授業」をテーマに行った4年間にわたる研究から、令和3年に4年次の研究として行った授業実践例を提示し、成果を論じたものである。附属学校における9年間の学びのつながりを考慮した音楽授業を具体化できた。

キーワード：音楽授業、小中連携、附属学校連携、読譜、記譜

## 1. はじめに

本論文は、宇都宮大学共同教育学部および附属小学校、中学校が音楽プロジェクトとして音楽科の授業について、「学びをつなげる音楽授業」をテーマに行った4年間にわたる研究から、令和3年に4年次の研究として行った授業実践例を提示し、成果を公表するものである。

宇都宮大学共同教育学部では附属学校と連携し、各教科でプロジェクトを立ち上げ、授業研究を行っている。

研究のスケジュールは7月から開始され、翌年6月までを年度としている。年度末にあたる6月には公開研究会が開催され、成果発表の場としている。公開研究会までの期間には、校内研究会、事前研究会、教員研修会などが開催される。

研究は当初3年間の予定であったが、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、4年間に延長された。

1年次 平成30（2018）年7月～令和元年6月

2年次 令和元年7月～令和2年6月

3年次 令和2年7月～令和3年6月

4年次 令和3年7月～令和4年6月

音楽プロジェクトは大学教員2名、附属小学校教諭2名、附属中学校教諭1名で構成されている。月に2回程度、附属学校教員が課題を持ち寄り、教材研究や指導案検討などを行う「附属音楽プロジェクト会議」を実施している。子供たちに身に付けてほしい音楽の知識や技能の育成を、附属学校として小学校6年間、中学校3年間の合計9年間を見通し、研究している。

本プロジェクトでは、平成30年7月から4年間の研究テーマを「学びをつなげる音楽授業」に設定し、新学習指導要領で示された「学びに向かう力・人間性等」の育成と、附属学校園の「学びをつなげる力」「かかわり合う力」「やり遂げようとする力」に関わる資質・能力の育成を目指すことにした。

音楽科では、テーマに掲げた「学び」について①学習の形態、②教材の特質、③学習の過程 という三つの観点から考えた。

①は、音楽科という教科の存在意義に関わる重要な項目である。音楽は習い事など個人指導の形態で

† Rie HIRAI\*, Shin-ichi KOHARA\*, Chikako KAYANO\*\*, Naomi NAKAMURA\*\* and Akari FUJINUMA\*\*\*: A study on the continuity of learning in music lessons in elementary and junior high schools

Keywords: cooperation education, Music class, Reading notation, Writing notation

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Elementary School of Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\*\* Junior High School of Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp 平井李枝)

学ぶことも可能であるが、学校における教科としての学びには、そうした個人指導によるレッスンなどでは得られない、他者との交流から生まれる音楽的な思考力や情操の育成がある。ここに音楽科が果たす重要な役割があり、教科独自の学びの形がある。

②は、教材楽曲の音や音楽に対する感性に関わる項目である。音楽の素材となる音について、その性質や特徴を聴き取り客観的に評価する力は、表現及び鑑賞の全てに共通するものであり、音楽的な見方や考え方の基礎的な能力となる。

③は、音や音楽を感受する過程に関わる項目である。ここには、音の刺激として受け止めた対象を、音楽という文脈の中で意識化することが含まれている。ここには、身の回りの音に対する認識を「雑音・騒音」から「楽音」へと転換していく過程において、日常生活経験の中で無意識に受け止めていた音の存在に気付き、その音が持っている特徴を捉え、その音に何らかの意味を見つけ出す過程がある。この感受の過程が、思いや意図を持って表現することに深くつながっている。

このような「学び」の共通理解をもとに、音楽プロジェクト全体で研究を進めることにした。

音楽科では「学びをつなげる力」「かかわり合う力」「やり遂げようとする力」で育成したい資質・能力を次のように設定した。

### 【学びをつなげる力】

様々な音楽や音楽活動、他教科での学びや生活経験を生かしたり関連付けたりしながら、思いや意図を表現する力。

### 【関わり合う力】

多様な思いや感じ方を認め合い、試行錯誤する中で折り合いをつけたり、友達と協働したりしながらよりよいものを創りだすための力。

### 【やり遂げようとする力】

多様な価値を認め合い、ねばり強く取り組む力。

この資質・能力を育成するために、1年次、2年次は、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱を有機的に関連させながら、音楽の表現と鑑賞の二つの領域を相互に効果的につなげる工夫を考えた。児童・生徒が、協働しながら意欲的に音楽活動を行う楽しみを感じ、音楽をきっかけに広い視野を持ち、自発的な深

い学びにつなげることを通して、学びを生活や社会に活かせる力を育成するため教材や評価の検討を含め他教科との連携の可能性等も考慮した。

その成果として、①鑑賞教材を中心とした学習の中から創作、歌唱から創作といった他の領域へ「学びをつなげる」授業方法の工夫により、子どもたちの学習意欲を引き出せる、②授業を円滑に進行するための教材や教具機器を工夫して用いることにより、友達とつながりながら生き生きと活動することや、技能の向上に顕著な効果がある、などが明らかになった。

音楽プロジェクトでは、以下のような子どもの育成を目指し、「①学習の形態②教材の特質③学習過程」の3つの学びの観点を含めて研究を進めていくことにした。

### 【小学校低学年】

楽しく音楽にかかわり、友達に思いを表現する子ども

### 【小学校中学年】

進んで音楽にかかわり、友達とかかわりながら音楽のよさや面白さに気付き、思いや意図をもって表現する子ども

### 【小学校高学年】

主体的に音楽にかかわり、友達とのかかわりを大切にしながら音楽のよさや面白さを味わい、より豊かな音楽表現を目指す子ども

### 【中学校1学年～3学年】

音楽活動を通して豊かな情操を培うとともに、主体的・対話的な表現活動に取り組み、音や音楽と生活や社会のかかわりを実感できる子ども

3年次から4年次の研究においては、1年次、2年次に引き続き、小学校と中学校の9年間を見通して、各学年における「発達段階に応じた目指す子ども像」に基づき、育成したい資質・能力に対応する子ども像を検証した。検証では、音楽学習における「音楽を形づくっている要素」の扱い方に着目しながら「学びをつなげる力」に重点を置いた音楽授業の展開を研究している。これまでの成果から得られた、学習領域の融合と教材・教具の工夫という観点をふまえ、どのような効果が得られるか検討を行った。

令和2年3月から、新型コロナウイルス感染症対策により音楽授業に多大な制約が課されている。飛

沫感染の危険性から、歌唱や器楽などの演奏が困難となっている。そこで、3年次、4年次は小学校、中学校ともに「読譜」に焦点を当てた。1年次、2年次の研究で得られた成果をもとに、中学校で身に付けるべき音楽の基礎的能力である「読譜」につなげられるよう授業の工夫を研究した。

小学校では音や音楽を可視化する工夫として図形楽譜や拡大楽譜などを用いた実践を低学年から学年を超えて取り組み、その効果を検証している。また教具としてICT機器の活用による学習効果の研究として、タブレットを用いた学習も授業に取り入れ、工夫を重ねた。

中学校では、読譜と鑑賞を関連付け、記譜法の学習として、楽譜を用いて楽曲の構成を理解させるなど、学びのつながりを感じられるよう授業を工夫した。記譜法を学ぶために最適なワークシートの開発なども行っている。

本論文では、4年次の授業実践例を具体的にあげ、その成果について論じることとする。

## 2. 附属小学校での実践

小学校では、音楽プロジェクトで目指す学びの道筋に示している子どもの育成を目指し、「①友達と協働し、音楽の楽しさを味わえる工夫」「②音や音楽の特徴に気付き、音楽的思考に向かうための支援」の2つを柱とした方策を基に授業づくりを行っている。方策①では、一人ひとりが思いを持ち、音や音楽と向き合うことができる場の設定や、互いの表現を知るためのペア、グループ活動の設定を、方策②では、音楽を形づくっている要素に気付くことができる音や音楽、それらの可視化の方法の選定に取り組んでいる。

### 2-1 小学校下学年での実践

(1) 小学校第3学年対象 令和2年11月実施

題材名：「チャチャチャのリズムで遊ぼう」

授業者：栢野慈子

本題材では、音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴に気付き、チャチャチャのリズム伴奏をつくることを通して、どのようにまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図を持つとともに、曲の特徴をとらえた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図を持ち、それらを表現するために必要な技能を身に付けることを目標としている。

### ①友達と協働し、音楽の楽しさを味わえる工夫

本時は、教科書に掲載されている『まほうのチャチャチャ(教育出版)』のリズム伴奏づくりを行った。互いの思いや感じ方を認め合い、試行錯誤する中で折り合いをつけ、協働して音楽をつくりあげていく力を育てたいと考え設定した。前時までにチャチャチャについて「のりのり」「元気」「明るい」「楽しい」「にぎやか」などのイメージを共有した。近い表現ではあるが、全員が同じ言葉で表現しているわけではない。また、同じ言葉を用いても、全く同じ思いであるとは限らない。“〇〇なチャチャチャ”とテーマを決めず、あくまでもチャチャチャが持つ雰囲気合うようにつくる活動としたことで、一人ではできないリズムアンサンブルの活動を通し、そのわずかな誤差やニュアンスの違いを含め、他者の感じ方を認めて折り合いをつけながら一つに集約していくことが必要となると考えた。リズム譜を見て、どんなリズム伴奏になりそうかを事前に全員で考えてから音を出して確かめたり、試したものを比較したりするような場を設けたり、さらに教師がどうしてそのように感じたのかを尋ねたり声をかけたりしたことで、友達と意見を交わして自分の思いと比較しながら何度も試し、グループだからこそできる音楽づくりをすることができた(図1)。



図1 録画した自分たちの演奏を聴いて確かめる様子

また、活動するにあたり、教科書に示されているチャチャチャの5つの主要なリズムから、3つないし4つを選択することとした。そうしたことで、チャチャチャとして面白い、楽しいと思う組み合わせを見つけようと、演奏しながら知覚・感受したことやiPadの録画を見聴きして感じたことを基に話し合いをしながらグループで様々な組み合わせを考えては試すことができた。

②音や音楽の特徴に気付き、音楽的な思考に向かうための支援

本題材では、個々が持つリズムカードとは別に、5つのリズム譜を縦に並べて掲示した。それにより、選ぶリズムの組み合わせによって重なる部分や休符の位置が変わり、雰囲気や音が互い違いに聴こえたりする面白さに気付いたり、重なった時の聴こえ方や強弱などの予想をして話し合い、試すことができた(図2)。



図2 視覚化したリズムの重なりを見て話し合う様子

また、グループ活動の際に使用する音や音楽の選定として、歌と同じリズムで楽器を打ってしまうことを防ぐため、ピアノ伴奏に旋律を加えた音源を作成した。旋律をオルガンで弾いたことで、ピアノ伴奏と音色が異なるため聴き取りやすく、旋律を小さめに流しても子どもたちがどこを演奏しているのかわからなくならず演奏することができた。

(2) 小学校第1学年対象 令和3年5月実施

題材名:「どれみとなかよし」

授業者: 栢野慈子

本時は、聴こえる旋律に合わせて体を動かし、旋律の音の動き方、高さや曲の雰囲気の関わりに気付くことを目的としている(図3)。第1学年5月という発達段階による実態を踏まえ、方策②に特化した授業づくりを行った。



図3 旋律に合わせて体を動かす児童の様子

②音や音楽の特徴に気付き、音楽的な思考に向かうための支援

子どもたちが理解しやすいよう、旋律の音の動き方に「あがるん」「さがるん」等の名前を付け、図形楽譜と合わせて「動きの友達」として示した(図4)。それらを基に、身の回りの音や知っている音楽を同じ図形楽譜で表してクイズを行ったり、旋律の音の動き方や高さや雰囲気を意識して聴き、即興的に体を動かして表現したりすることで、雰囲気や旋律の音の動き方や高さの関わりに気付くことができるようにした。音の高さと旋律の音の動き方に観点を絞っていたため、それまで示していなかった音の変わらない部分に対して子どもたち自身が「まっすん」と名前を付けるなど、主体的に聴き取ろうとする姿も見られた。意図的に設けた救急車のサイレンのような部分について「なみなみちゃんだからずっと続くかんじがする」と述べたり、階段のように滑り落ちてくるような旋律について「自転車で坂を滑り降りているみたい」と述べたりするなど、体を動かしたことで気付いたことも多くあった(図5)。

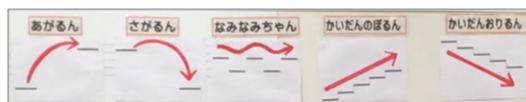


図4 「動きの友達」の例



図5 救急車のサイレンと「まっすん」を含んだ旋律の図形楽譜

予想していた高さよりも低い音から旋律が始まったり、予想していたよりも高く上がっていった際には、悲鳴を上げ、2回目から調整したりする姿も見られた。また、教師が作成した短い旋律の音の動き方や高さの一部を変えて、chrome music Lab.で作成した図形楽譜を見ながら聴き比べる活動では、消えてなくなってしまう音を目に見える形で残し、聴こえる音楽を旋律の音の動き方や高さ結び付けて

捉えることができるようにしたことで、聞き取ったことと感じ取ったことについて、どの部分のことなのかを指し示しながら友達に伝えることができた(図6)。目の前で旋律の音の高さを一音だけ変えて示した際には、「こっち(高くなった)の方が面白い」とジャンプしたり手を動かしたりしながら述べる児童もいた(図7)。聴いているものがどう変化したのかが一目瞭然であり、1年生の子どもたちの学びをサポートする方法として非常に有効だったと思われる。この活動を行ったことで、次時の時間に、第1時にも鑑賞した『きらきら星変奏曲』を聴いた際には、感じたこととともに、「なみなみちゃんがいた。」「階段あがるんの後で、あがるん、さがるんでジャンプするのが楽しい。」のように動きの友達の名前を挙げながら体を動かし、旋律の動きに着目して聴くことができる子どもが増えた。また、その後の様々な音楽活動で、動きの友達の名前を挙げる子どもも多くみられるようになった。このような低学年での活動が、学年が上がった際の様々な音楽活動で生かされると考える。



図6 聞き取った部分を指し示して説明する児童の様子

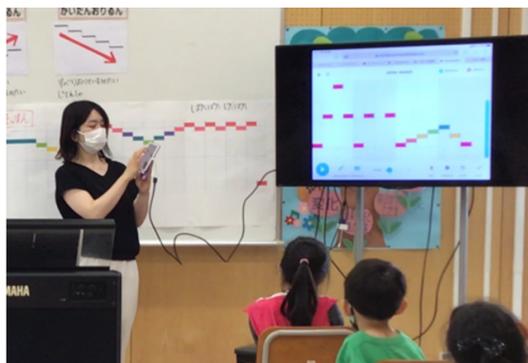


図7 旋律の音の高さを変えて提示する様子

### (3) 第1学年対象 令和3年12月実施

題材名:「いいおとみつけて」

授業者: 栢野慈子

本時は、奏法・力加減などを変えることによって、音色や強弱等が変化することに気付くことを目的としている。使用する楽器は音色と奏法、素材、1学年児童が扱いやすいかという観点を基に、トライアングル、ウッドブロック、すず、クラベス、ギロ、タンブリンの6つとした。前時までには短時間ではあるがすべての楽器に触れ、その中でもっと音探しをしたいと選んだ楽器を用いて音探しを行った。本時は、基本となる打ち方を知るのではなく、まずは様々な鳴らし方を試し、同じ楽器でも、自分の演奏の仕方や打つ場所等を変えることで音色が変わることに気付くことを優先した。このようにじっくりと奏法の音色の関わりに関する経験をしたり、聞き取った音を自分なりに表現したりすることが、学年が上がった際の器楽や鑑賞、音楽づくりの学習につながると思った(図8)。



図8 様々な奏法を試す様子

#### ①友達と協働し、音楽の楽しさを味わえる工夫

本時では、一人ひとりが自分で選んだ楽器に向き合い、聞き取った音を擬音や図などの自分なりの方法で表現する活動を設定した。そうしたことで、友達の鳴らす音を一緒に聴き、音に対する捉えを共有する際、互いの気付いたことや思いに共感したり、同じ音を聴いても様々な感じ方や表現があることに気付いたりすることができると思った。また、グループ設定の工夫として、同じ楽器を選んだ友達の近くで活動できるような場を設定した。友達の試している奏法を見たり音色を聴いたり、見つけた音について教師が尋ねて子ども同士を繋いだりすることで音の捉えを共有し、より多くの音の変化に気付いたり、

見つけた音の面白さを共に味わったりすることができた(図9)。



図9 音を聴き比べるウッドブロックのグループの様子

中間発表時に異なる楽器の友達の見つけた奏法やその音色を聴き、自分の楽器でも試することができるようにしたり、すずとクラベスについては、あえて一緒に活動するように場を設定したりするなど、異なる楽器での場の設定も行った。それにより、素材や大きさによる音の高さや音色の違いに気付くことができた(図10)。



図10 色による音色の違いを説明する様子

## ②音や音楽の特徴に気付き、音楽的な思考に向かうための支援

奏法・力加減と音色や強弱の関わりに気付くことができるように、また、再度同じ音を鳴らして友達に伝えることができるように、どのように鳴らしたのか、どんな音なのかを楽器の写真や載せたワークシートに言葉や図を書き込む活動を設定した。その際、各々の生活経験や音楽の経験によって元々持っている表現の仕方が異なった。その表現に優劣をつけるので

はなく、自由な表現をさせることで、自分とは異なる友達の表現に触れ、様々な表現方法を知り、自分の考えにより近い表現をすることができるようになってほしいと考えた。聴き取った音を擬音、比喩、形容詞を用いた“〇〇な音”のいずれかを用いて表現していたが、それまでと異なる表現を用いる子どもも多くいた(図11~13)。これらの経験が、今後学年が上がった際の音楽表現へつながっていくと考える。

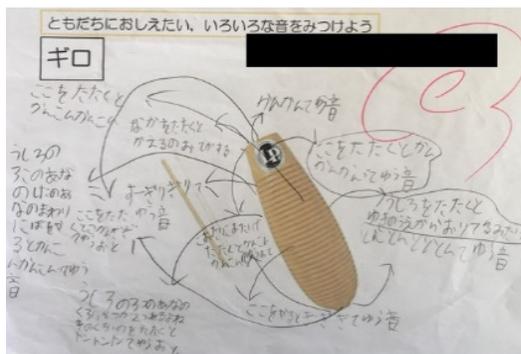


図11 児童のワークシート1

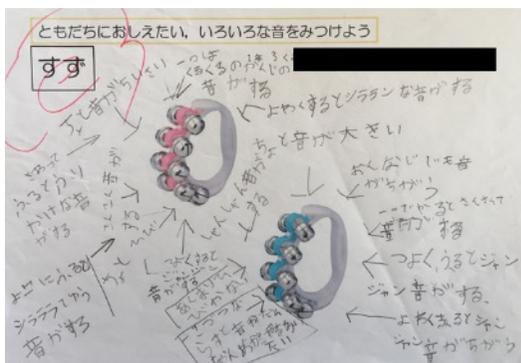


図12 児童のワークシート2

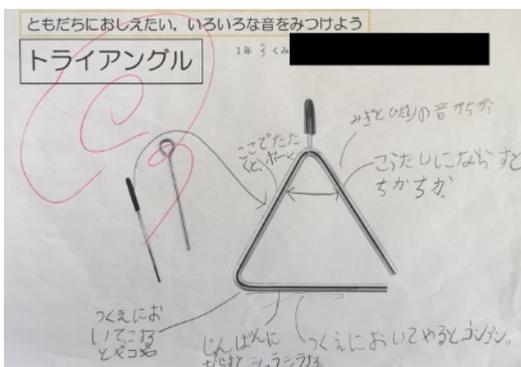


図13 児童のワークシート3

## 2-2 小学校上学年での実践

(1) 小学校第5学年対象 令和3年6月実施

題材名：「和音や低音のはたらき」

授業者：中村直美

本題材では、曲想と音の重なりや和音の響きとの関わりについて理解し、ハ長調の楽譜を見て歌い、和音を基にした音楽づくりを通して音楽の仕組みを用いて音楽をつくる技能を身に付けることを目標としている。『茶色の小びん』の旋律に合う低音パートをつくることを共通課題とし、自分のつくった1フレーズを友達とつなげて1曲にした。前時までに、「リズムづくり」「和音の仕組みの理解」「リズムに音を当てはめる」とその時間ごとの活動内容を明確にし、ワークシートに思考過程が残せるようスモールステップで進めることとした。

### ①友達と協働し、音楽の楽しさを味わえる工夫

本時では、自分のつくったフレーズを友達とつなげて1曲に仕上げるために、様々な調整をした。一人一台キーボードを使用して、自分の担当箇所は自分で演奏することを基本とした(図14、15)。子どもたちから、リズムの統一性はどうか、フレーズの最後の音はつながる感じになっているか、終わる感じになっているか、繰り返しがあったほうがよいのでは、など自分の思いを生かしつつ、グループでの話し合いを進めながら少しずつ曲を変化させていく様子が見られた。和音の中から音を選んでも、旋律と同じ音を重ねた場合と旋律とは違う音を重ねた場合では、響きの豊かさが違うことも試行錯誤していく中で、子ども自身が気付くことができた。



図14 キーボードで音を確認しながら記譜する

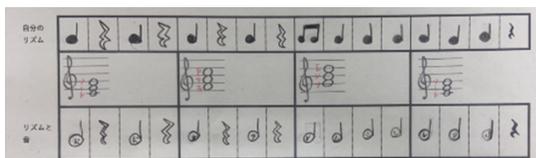


図15 ワークシート

### ②音や音楽の特徴に気付き、音楽的な思考に向かうための支援

本時では、主に思考過程を残すツールとして「まなボード」を使用した(図16)。前時に自分のつくった低音パートをシートに挟みシートの上から変更箇所を書き加えることができる。また、つなげる順番も容易に変えることができるため、子どもたちの実態に合っているものであった(図17)。「～のような感じにしたかったからリズムを〇〇にした」というような、思いを表現する場も設定することで、自分たちのつくった低音パートの工夫した点が意識できるようにした(図18)。ワークシートは、第1段階としてリズムのみ記入、第2段階として階名、五線譜記入というように記譜できるようにして進めていった。リズム作成までは非常に気持ちよくできていた児童も、音をつけて弾いてみると実は非常に難しい旋律になってしまうことが多々あった。音をたくさん入れることがいいことではない場合もあることに気付くことができた。

最後に、CDで旋律をリピートしてかけながら、全グループをつなげてキーボードで演奏した。出来上がった曲をみんなの前で演奏できたこと、他のグループの演奏と自分のグループの演奏を聴き比べることができたことも本時の大きな成果であったと考える。

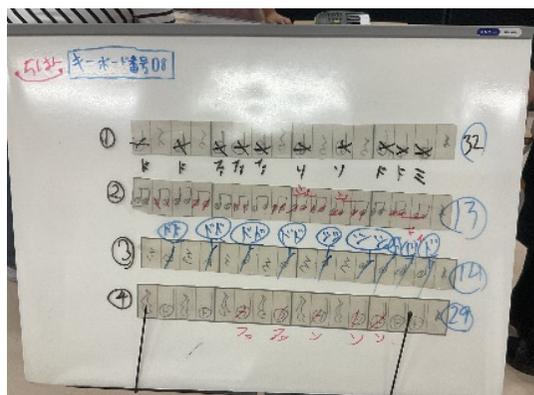
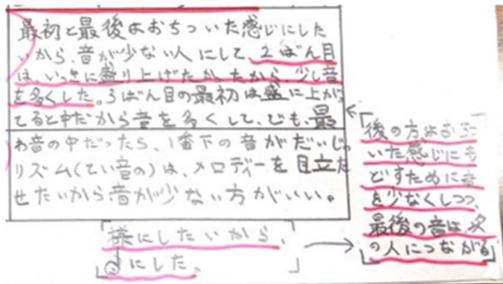


図16 「まなボード」での思考の深まり



図17 つなげて演奏している様子



「〇〇したかったから〜した」⇒思いや意図の表現

図18 振り返りワークシートより

(2) 小学校第5学年対象 令和4年2月実施  
 題材名：「変奏曲を楽しもう」  
 授業者：中村直美

本題材では、主題の旋律に注目し、旋律、リズム、楽器の組み合わせなどの変化に気付き、様々に表情を変えて主題が現れる変奏曲全体を味わって聴いたり、音楽づくりの様々な発想を得て自分なりの変奏曲を創作したりする活動に主体的に取り組むことを目標としている。前時までにピアノ五重奏『ます』第4楽章を鑑賞し、主題が変化していく様子や演奏している楽器の移り変わりについて気付いたことを交流したり、それぞれの変奏曲の楽譜を見比べて、旋律や音がどう変わっていくかを共有したりした。旋律の変化の中から自分たちの変奏曲づくりに生かせそうなことを【変奏曲づくりのコツ】として3つ取り上げ、本時における変奏曲づくりの手立てとすることとした。

本時では、童謡『チューリップ』を主題とし、「リズムの変化」「高さの変化」「合いの手を入れる」を【変奏曲づくりのコツ】として変奏曲づくりを行った。

①友達と協働し、音楽の楽しさを味わえる工夫

本時では、一人一台キーボードかタブレットのどちらかを使用することで（図19）、まずは自分の表

現と向き合う場を設定すること、それぞれの思いを曲に表す時間を十分に確保することに留意した。また、主題のフレーズの一部の変化方法をいくつか例示することにより、思いを表現できる手立てとなるようにした。



図19キーボードでの旋律づくり

主題をどのように変化させたのか、自分の使った【変奏曲づくりのコツ】や、どんなチューリップを表現したのかをペアで伝え合う活動を取り入れることにより（図20）、さらに思いを膨らませることができた。実際、本時では、初めはタブレットに主題を入力していき、音を増やしたりリズムを変化させたりしてただけだった児童が、話し合い活動後、旋律の高さをチューリップの成長になぞらえ（図21）、成長のエピソードを重ねて旋律を変化させる様子が見られた。ペア活動により思考の深まりが見られた結果であると考えられる。

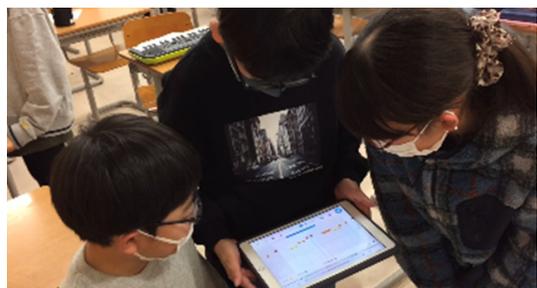


図20 タブレットを見ながら伝え合う様子

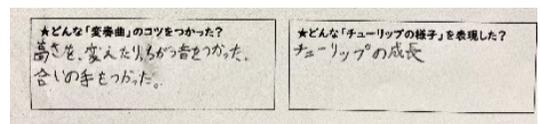


図21 ワークシートの一部より

さらに、それぞれの変奏曲をつなげて演奏し、「5年3組チューリップ変奏曲」とすることで自分の演奏も必ず第〇変奏曲となることになり、友達とつながる

楽しさ、聴き比べの楽しさを味わうことができた。

## ②音や音楽の特徴に気付き、音楽的な思考に向かうための支援

本時ではchromo music lab.のSONGMAKERを使用した(図22)。メリットとしては旋律を簡単に作成することができる点、音の高さの変化に気付きやすい点、作成した旋律が図形で残りその場で流れることで何度も作り直しができる点があげられる。デメリットは、細かい音を表現したい場合になかなか自分の思った通りに入力できない点である。音楽的に能力の高い児童からは、SONGMAKERで作曲するよりも自分で自由に演奏したいという思いも感じられたため、キーボードかタブレットか選んでよいこととした。キーボードで演奏する場合には、旋律を楽譜に書き記し(図23)演奏している様子を動画で撮影することによって、音楽を「見える化」することとした。

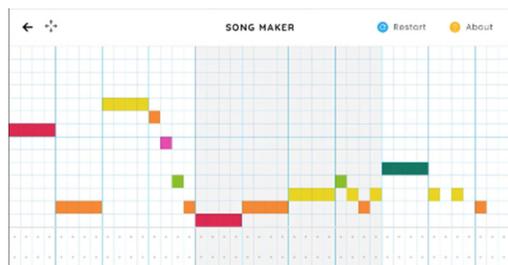


図22 実際に作った旋律の動きえ合う様子



チューリップ

★どんな「変奏曲」のコツをつかった？  
リズムに気をつけて  
変奏曲を作った。

★どんな「チューリップの様子」を表現した？  
チューリップのメロディは  
なつたまま、いろが絵に作ら

図23 キーボードで作った旋律を五線で表した

## 2-3 小学校における成果と課題

コロナ禍において、大幅に音楽活動が制限される中、小学校としての研究をすすめてきた。その時々で、使用ツールは変化してきたが、学校における音楽活動のよさは友達と一緒にできることであると考えられる。そのために、友達との曲作りや自分の思いの交流は今後も大切にしていきたい。

子どもたちの発達段階に応じた思いを表現するための場の設定を工夫し、旋律の移り変わりを子どもたちが気づくための授業づくりをすることができた。今回の公開研ではオンライン配信のため使用したい曲が著作権上使用不可であったことから曲の選定の重要性を感じている。

実践例下学年においては、提示した曲は教師自作曲であり、知覚しやすくするために作ったため、子どもたちは音の動きに着目し、非常に意欲的に聴くことができた。しかし、音の動きに集中することで、「〇〇な感じ」という感受と関連づけることが難しかった。このことから、選曲の重要さが浮き彫りになった。また、「〇〇な感じ」を十分に表現できるだけの時間の確保と、語彙力に応じた活動内容を今後も検討していく。

実践例上学年の使用曲『茶色の小びん』『チューリップ』は、ほぼ全員が知っている曲であった。知っている曲を基にしての曲づくりをしたことで意欲的に取り組むことができた。ねらいを達成させるための曲の選定は非常に重要であると改めて感じた。高学年では、初めての変奏曲づくりではあったが、ほぼ全員が知っている童謡『チューリップ』を主題とすることで、音楽を得意としない児童にもハードルは低くなり、自分の能力に合わせて幅広い表現をすることができた。4分音符を8分音符や16分音符に分割させたり、経過音や休符を入れたりと事前に例示をすることで意欲的に旋律を変化させていく様子が多く見られた。

さらに、SONGMAKERを使用することにより、音の高さを意識することができた。児童の中には、階名をふることに慣れていても、音の高さが意識できず正しい演奏ができないことがある。この活動は読譜にもつながるものであると考える。



た。小学校では、「さくらさくら」や「ソーラン節」などの音階をもとに旋律をつくる学習やお囃子の音楽や雅楽など日本や郷土の伝統音楽について学習しているため、中学校では、民謡の簡易的な楽譜から音楽的な特徴や音階を見つけ出し、それらの特徴を創作で生かすことのできるよう使用するリズムの種類を増やすなど読譜や記譜の能力向上を試みた。

また、ICTを使った実践として、タブレット機器(iPad)の音楽アプリや録画機能を用いて、創作過程を保存し、客観的に鑑賞しながらテーマやイメージに合うメロディーにするために試行錯誤できるよう工夫した。音楽の基礎的能力である「読譜」や「記譜」の能力を育成するため、音だけでなく楽譜をもとに話し合う活動や創作の過程を楽譜に音符や文字で残す活動を多く取り入れた。(図26) 中学校に入り、初めての創作活動であったため、最初は四分音符のみを使用して簡単な旋律を創作し(図27)、音のつなげ方や終止音を意識しながら徐々に工夫を加えていくという手立てをとった。8小節の旋律を音階の特徴を生かしたテーマやイメージにさらに近づけ、思いや意図のある作品にするために音楽を形づくっている要素(強弱、速度、音のつなげ方、リズム、音色など)をもとに工夫方法を提示し、ポイントを絞って創作活動を行うことで、要素を知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じながら創作させることができた(図28)。



図26 タブレットで作品録画や楽譜の訂正をしている様子

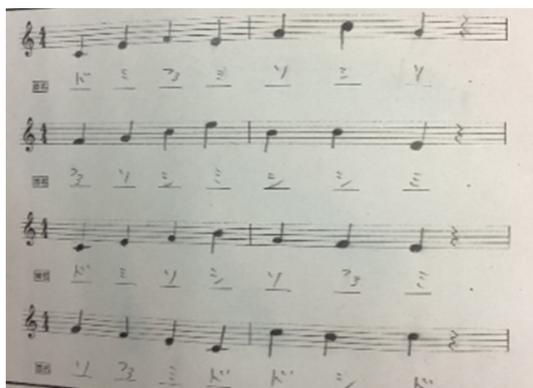


図27 ワークシート

沖縄 音階 テーマ: 美ら海 (8)班  
イメージ: さわやかではねる感じ

リズムを(はねる感じ)にした 全体的に高い音

トミトミソシヨシヨシ

ソシシシトット ミト

沖繩、はねる音のぼした

フェ ミトミソシ ヨシソトミ

トシソシ トット

工夫したところ  
・強弱を変えて、ソの音が見えよように。  
・リズムを沖縄、(は)ねる感じにした。

図28 ワークシート

そして、本時では本校の授業支援クラウドであるロイノートの共有機能を利用し、クラウド上に提出されている他グループの作品(楽譜と演奏録画)を各自で鑑賞して他グループにアドバイスを送り、もらったアドバイスを参考に、さらに作品の質を高める活動を行った(図29)。生徒たちは、作品の良いところや音階の特徴が生かされている部分を見つけるだけでなく、イメージやテーマを作品に生かすための方法の提案についても活発に意見交換をしていた。

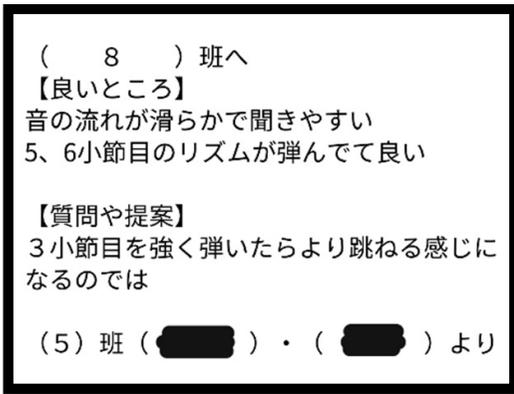


図29 ワークシート

本題材を通して、ICTを活用することで記譜や演奏の録画、および鑑賞が容易になり、生徒の対話的活動が活発になる様子が見られた。記譜の添削に関しては、教員がクラウド上で添削を行い、一斉に返却可能のため、非常に効率的であった。また、作品の比較や修正も容易になったため、読譜や記譜能力も身に付いていくのではないかと考える。今後は、本題材で身に付けた知識や能力を生かして、個人で創作を行う活動を検討していきたい。

#### 4 おわりに

附属小学校、附属中学校、大学が共同で共同で研究を行っている「音楽プロジェクト」では、「学びをつなげる音楽授業」をテーマに、9年間の学習の見通しを持って授業を行ってきた。

音楽は知識や技能は積み重ねが非常に重要な科目である。特に読譜や記譜の技能は顕著である。

附属学校では、小学校1年生の段階から音高や音程、音色の違い等に気付けるよう、体を動かしながら学習したり、図形楽譜や拡大楽譜等を活用するなど、教材や教具、掲示物にも工夫を行っている。

こうした学びの積み重ねから、中学校では、交響曲のスコア（指揮者用総譜）を見ながら鑑賞したり、創作した音楽を五線に記譜することができるようになってきている。「音楽プロジェクト」において、小学校や中学校での具体的な学習内容や、習得すべき技能などを意見交換したり、議論することで、附属学校として一貫した音楽教育が実現できていることは、本プロジェクトの成果といえる。

附属学校の音楽授業において、ICT機器は7年ほど前から積極的に取り入れ、円滑な授業運営に役立

ている。令和2年度からは、児童・生徒一人一台タブレットが用意されており、学習の補助教具として活用している。演奏記録や録画提出、ワークシート等の提出物の一括管理や配付、共有などに用いている。また音楽づくりや創作において、chrome music Lab.、Garage Band等のアプリを用い、読譜や記譜に向かうための補助的役割を担わせている。

音楽プロジェクトの4年間の研究成果として、以下の3点を明らかにすることができた。

①「読譜」の導入として図形楽譜や拡大楽譜を取り入れるなど視覚的教材に工夫を凝らすことで、小学校低学年から子どもたちの音や音楽への意識を変化させられることが明らかになった。

②鑑賞教材や創作活動など様々な領域から読譜や記譜への学びをつなげることで、それぞれの学習に有機的なつながりを生み出すことができた。楽譜への興味を高め、読譜能力の必要性を実感しながら学習できることが明らかになった。

③授業で獲得した知識や技能を音楽授業の他の領域などで実践する姿も見られ、子どもたちに「学びをつなげる力」がついていることが明らかになった。

今後も引き続き「学びをつなげる」音楽授業の観点から、音楽授業の各領域の有機的なつながり、小学校と中学校の学びのつながりを体感できる授業方法を検討していくことを計画している。どの領域においても音楽の基礎的能力を獲得できるよう、「学びの積み重ね」を意識した授業の工夫を検討していきたい。

令和4年4月1日 受理



# A study on the continuity of learning in music lessons in elementary and junior high schools

Rie HIRAI, Shin-ichi KOHARA, Chikako KAYANO,  
Naomi NAKAMURA and Akari FUJINUMA